

Book Review

チェアサイドとラボサイドで共有したい 補綴再製をなくすための 臨床テクニク 24

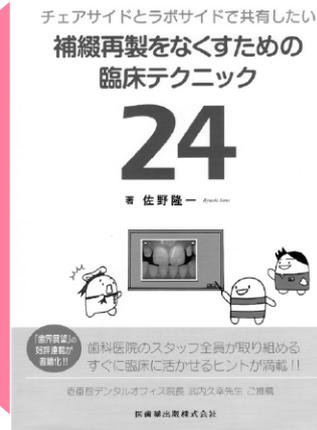
佐野隆一 著



Reviewer

福本晃祐 Kosuke Fukumoto
(山梨県・ふくもと歯科医院)

A4 変判, オールカラー, 120 頁
定価 (本体 6,400 円+税)
医歯薬出版刊



待ちに待った待望の佐野氏の書籍が上梓された。著者との出会いは、私が開業する前からであり、独立後にチーム力を上げるためにスタッフ研修もお願いし、現在は公私ともにたいへんお世話になっている歯科技工士である。

昨今、歯科のデジタル化という巨大な波が日本に押し寄せてきているなか、印象材や石膏のようなマテリアルが消えていくかもしれないとされるが、すべてがなくなることはない。またすべての補綴物がデジタルで製作できるとも限らない。そうすると「間接法」について理解する必要は依然として存在し、それを理解したうえで時代に順応していくのが望ましいと思う。当然、デジタルとアナログという両刀使いができることが望ましいが、それぞれの利点欠点を知ること、より良い補綴物の製作が可能になるのではないだろうか。

本書では歯科技工士からの視点だけでなく、チームの一員としての歯科技工士、歯科医師、歯科衛生士の視点で書かれており、誰が読んでもたいへん勉強になる内容となっている。なぜ？ どうして？ といった誰でも直面する疑問にもわかりやすく解説されてお

り、たいへん読みやすい。しかも奥様である優子氏の素敵なおもしろいイラスト付きで、教科書のような窮屈さは全く感じられない。

ここまで読者視点で執筆できるのも、佐野氏が武内久幸先生（東京都・杏番館デンタルオフィス）という素晴らしい臨床家の下で、チームアプローチを行いながら院内技工士として10年間研鑽を積んだからであり、歯科医師の考えや気持ち、歯科衛生士の仕事内容など、それぞれの役割を熟知しているからではないだろうか。臨床の現場を知り尽くした著者が補綴再製ゼロのためにかなり細かい部分にまでこだわって書かれており、できればチーム全員で読まれたり、院内勉強会のテキストとしてもたいへん良い書籍である。

第1章では印象と石膏模型について書かれており、寒天アルジネート印象のポイントやシリコン印象の特性に言及している。このテーマは、臨床でよく遭遇する場面であり、具体例をもとにわかりやすく解説されている。

第2章はバイトがテーマである。日常の臨床では調整量がなぜ多いのか検証することはあまりなく、多くはブ

ラックボックスの中に入ってしまったているかもしれないが、著者は貴重な一つひとつのケースからのフィードバックをもとに、かなりの追求を行っている。調整量を限りなく減らすためにはどうしたら良いのか、わかりやすい具体例をいくつかあげて解説されており、たいへん興味深い内容となっている。

第3章ではシェードと資料について、とてもわかりやすく書かれており、著者の言う通りのポイントを押さえることで、誰でもできるようになると思う。

また、ところどころに「検証」パートが組み込まれているのだが、これがたいへん面白い。たとえばフルジルコニアの予後について書かれているパートがあるが、今後このような情報提示をもっと行っていただけることを期待している。

本書のなかで、私の拙い失敗例を掲載していただいている。反面教師として読者の方に少しでも参考になれば幸いである。この名著は補綴再製ゼロを目指して読まれる方だけでなく、医院に必携のテキストとして置かれることをオススメしたい。